

あるむぜお

府中市郷土の森博物館だより
al museo
2019年3月20日
No.127



傘をさして増水した多摩川を見物する人びと 昭和22年（1947）9月撮影

もくじ

- 1-2 水とともにくらしたむかし
その4…雨をしのぐ道具の変化
- 3 最近の発掘調査
甕を連結させた煙道をもつカマド
- 4-5 NOTE 上棟式と大工の神様
- 6 府中の身近な昆虫絵巻
④昆虫タイムスリップ
- 7 展示会案内
企画展 大西浩次星景写真展 森から見上げた宇宙
- 8 史料に見る府中の事件簿
④飯盛女の髪切事件

水とともにくらしたむかし

人びとは日常生活をはじめとし、さまざまな形で水と関わってきました。このコーナーでは「水」をキーワードに、昭和30年代以前の府中の暮らしを紹介してきましたが、今回はその最終回です。

その4…雨をしのぐ道具の変化

昭和22年（1947）9月、多摩川が増水し、氾濫寸前になりました。その時、人びとは当時木造だった是政橋の上から渦流を見物しています。まだ雨が降っているらしく、多くの人が傘をさし、一部の人は蓑のようないわきを羽織っています。骨の数が多い傘は和傘と考えられます。一番右の黒い傘は洋傘のようです。

水とともに くらしたむかし



その4…雨をしのぐ道具の変化

連載の最後は、日常生活のなかで雨水をしのぐための雨具をとりあげたいと思います。

雨のとき着用したむかしの道具に蓑があります。明治22年（1889）12月19日の毎日新聞に「蓑市 漸次都會に一用無し」という記事が掲載されています。毎年3月19日と12月19日は、浅草雷門前で蓑市があるが、近年は農家が雨天時の作業で着用するくらいで、東京では蓑を着る人が非常に稀なので出店も少ない、と紹介されています。江戸時代以前から代表的な雨具であった蓑は、明治中期にはもはや都會では着用されなくなっていましたようです。明治の府中市域は農村部が多数を占めていましたからまだ需要はあったと思いますが、現在では着用経験のある方はいないようです。

蓑の代わりは雨合羽でしょうが、それ以上に普及していくのが洋傘（こうもり傘）です。下の写真は、昭和26年（1951）に撮影された、雨天時の通学風景です。表紙に紹介した写真同様、傘が写っているのですが、その骨の数から、和傘と洋傘が混在しているのがわかります。

洋傘の骨が当時8本なのに対し、和傘は24本や36本が基本です。洋傘は布を貼るため破れにくいつくりになっています。そして、骨の材質が金属なので、重くならないようにその本数を少なくしています。それに対して、和傘には水をはじ



府中市立第五小学校付近のハケ下を通学する子どもたち
(昭和26年撮影)

きやすく加工した紙を貼るので、畳む際には折り目の線ができます。折り目の間隔が長いと、開閉時に破れやすくなります。そのため職人技で骨の数を増やし、極力紙が破れないようにしています。竹製の骨は、本数を多くしてもたいして重くならないので、持つのに苦労しませんでした。

「あめあめふれふれかあさんが じゃのめでおむかえうれしいな」と歌う、北原白秋作詞・中山晋平作曲の童謡「あめふり」。このなかに登場する「じゃのめ」とは、和傘の一種である蛇の目傘のことです。開くと蛇の目のように見えることからこの名があります。「あめふり」の曲が発表されたのは大正14年（1925）です。この曲のレコードは昭和35年までに15万枚売れたということですから、その頃までは「蛇の目」の意味を理解できる人が多かったと言えるかもしれません。

洋傘は明治時代には日本に登場しており、国内生産もされ、輸出産業にもなりましたが、高級だったのでしょう。府中市域では昭和20年代までは和傘を使用する人がまだ多くいたようです。

洋傘は戦時中生産が中止されていたようですが、戦後再開され、折り畳み傘も発売されます。さらに昭和28年に国産ナイロン生地の傘、33年には国産のビニール傘、35年にはワンタッチで開くジャンプ傘が発売されます。39年にはオリンピック景気とともにビニール傘が大流行します。遅くともこの頃までには全国的に洋傘が和傘を圧倒し、和傘を見るのは着物を着る結婚式などの特別な機会に限られてしまいました。

最近は丈夫な洋傘として、骨の数が16本や24本のものが登場しています。傘の変化は現在も進行中です。このように見ていくと、雨具も変化し続けていることがわかります。人びとはい変わらず何気なく雨（水）と接しています。人と雨との関わりがあまりにも日常的であるからこそ、こうした何気ない暮らしの変化は見逃しがちになってしまふのかもしれません。（佐藤智敬）

甕を連結させた煙道をもつカマド

日鋼町一丁目

府中市ふるさと文化財課

野田憲一郎



発掘されたカマド

奈良・平安時代の武蔵国府のマチに住む人々は、多くが豊穴建物で生活を営んでいました。豊穴建物にはほとんどの場合、壁の一辺にカマドが取り付きますが、今年度の発掘現場で武蔵国府の調査では類のない変わった構造のカマドを発見しました。

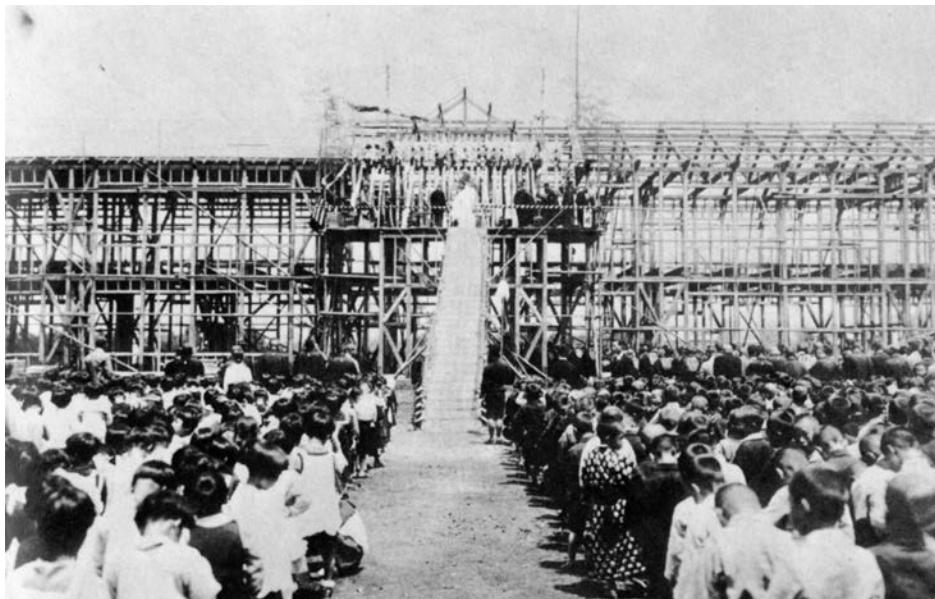
その発掘現場は、日鋼町1丁目のインテリジェントパーク内にあり、そこで発見した豊穴建物跡10棟のうちの1棟に付属していたものです。カマドは、火を焚く部分を白色粘土でドーム状に覆い、煙道というトンネルを通して煙を排出しますが、このカマドは、底を抜いた状態の土師器の甕を4個入れ子状に連結させて、煙道部分のトンネルを築いていました。このような構造のカマドは、武蔵国府で発掘した5,000棟を越える豊穴建物跡のなかでも初めてのものです。

同様のカマドは、神奈川県伊勢原市・厚木市・秦野市など相模国内で見つかっています。カマドに使用されていた4個の甕についても相模の甕の特徴をもつことから、カマドを造った人は相模国にゆかりのある人物と考えてよいでしょう。

では、なぜ相模国の特徴をもつカマドが、武蔵国府のこの場所に1基だけ見つかったのでしょうか。当発掘現場は、西側約200mに東山道武蔵路が南北に縦走し、そこから北東へ向かう斜行道路が至近を通るため、国内外から頻繁に人の出入りがあった場所といえます。この付近の発掘調査では、鍛冶関連遺物をはじめ砥石や紡錘車などの遺物が集中して見つかっており、居住する人の多くが手工業生産に関わっていた地域と推定されます。作業に携わる人の多くは、武蔵国内から雜徭（律令制で公民に課せられた労役）として徴発された人々と考えられますが、今回の発見は、その中には国外からの移住者が少数ながら居住しており、武蔵国府の手工業生産に関わっていたことを推測させます。このような特殊なカマドを造る人物は、きっと何らかの高い技術を持った人だったのではないかでしょうか。



写真提供・(株)島田組



1935年（昭和10）5月に行われた、旧府中尋常高等小学校上棟式の様子。児童が校舎前に整列し、二階部分に作られた祭壇で式が挙行されている。

▼ 旧府中尋常高等小学校の棟札

府中市郷土の森博物館の復元建物の一つ、木造の旧府中尋常高等小学校は、市立府中第一小学校の前身です。1935年（昭和10）に建設されました。以後1979年の新校舎建築に伴って解体されるまで、多くの子どもたちの学び舎として親しまれてきました。

その一部が現在の敷地に移築復元されたのは1982年のことです。府中市郷土の森博物館がオープンしたのは、その5年後の1987年で、復元建物のなかではもっと早く、実は博物館本館の建物よりも前に復元されたものです。

内部は移築前の姿を完全再現しているわけではありません。小学校の教育資料を展示し、教室の風景を再現するだけでなく、府中出身の詩人・村野四郎の記念館や、多摩川ふれあい教室など、さまざまな用途で活用されています。

この建物の2階講堂の壁面に、小学



校が建築された際の上棟式（上棟祭）
でつくられた棟札が展示されています。
上棟式とは、棟木を取り付けた時に、
建物の安寧を願うとともに、大工や屋根職人、壁職人などを慰労する行事です。
大規模に実施される際には、餅撒きが行われることもあります。

上棟記念棟札の表面中央に、「奉鎮祭 府中町立尋常高等小學校新築校舎」とあり、その両側に神様の名前が記してあります。その名は屋船久々能知神、屋船豊受姫神、手置帆負神、彦狭知神の4柱。いずれも上棟式の主祭神として代表的な神々です。建築儀礼以外では、あまり見ることのない祭神名かもしれません。しかしそれらは職人の間ではよく知られた存在でした。裏面には、当時の府中町長小川喜太郎、小学校校長、現場監督ほか総勢41人

旧府中尋常高等小学校校舎の上棟記念棟札には、建物名と上棟式の際祭祀する4柱の祭神名が記されている。

の職人や名士など関係者の名前が記されており、大規模な工事であったことがわかります。

▼太子講と莫越山神社の信仰

小学校の上棟式は町の大行事であったため神職を招いたものだったようですが、一般家屋での上棟式の多くは、職人たちによって行われ、内容は職人間の伝承によっています。府中の大工や鳶職、屋根職人など、建築に携わる人々の多くは、毎月1月初旬～中旬頃に集まり、聖徳太子をまつる太子講を開催していました。床の間に職人が使用する曲尺と呼ばれる定規を持つ聖徳太子が描かれた掛軸をまつり、供え物をしていたといいます。聖徳太子が大工道具の曲尺を広めたという説話などから大工の祖神とされ、江戸時代に建築に関係する人々から信仰を集めていました。

ところが、昭和40年代に府中市内で行われた、60代後半の大工さんへの聞き取り調査の際、興味深い証言がありました。職人の神様は実は聖徳太子ではなく、千葉県の莫越山におられる、という伝承が広がり、府中周辺の大工はめいめいに莫越山神社に参るようになったといいます。そして、莫越山神社のお札には「安房国朝夷郡莫越山神社 手置帆負命 彦狭知命」と書いてあるため、それをそのまま棟札に記すことがあったといいます。たしかにこの2柱の祭神は、小学校の棟札に記されていた名前と一致します。

莫越山神社とは房総半島の突端近く、現在の南房総市に鎮座する神社です。主たる祭神は前出の2神で、社伝によれば宮殿・家屋・器具・機械の類をはじめてつくった、工匠祖神・家屋守護祖神と紹介されています。

南房総市に隣接する千葉県館山市は、かつて安房国の国府があったところです。そこに鎮座する鶴谷八幡宮は、安房国の総社とされています。毎年9月に行われるこの神社の例大祭は安房国司祭（やわたんまち）と呼ばれ、千年以上継続しているとされています。祭礼時には、安房国を代表する10の神社の神輿がここに集結するのですが、莫越山神社はそのうちの1社もあります。

明治時代には、近隣千葉県内はもちろん、東京各地から莫越山神社に参拝する「祖神講」という大工や職人の講が組織され、信仰を集めてきたといいます。筆者がこの神社を訪れたのは平日で、



莫越山神社（南房総市沓見）社殿。同名の神社は同市宮下にも鎮座しているが、神職が在住し多くの神札を発行しているのはこちらの神社である。

参拝者はほかにいませんでした。神社の方にお話を伺おうとしたところ「職人の方ですか？」と逆に質問されました。建築関係の参拝者が現在も多いということなのでしょう。

東京方面から参拝するには、JR外房線に乗るか、車ならアクアライン、あるいは東京湾フェリーを使用する、かなり距離を感じる場所です。遠方であるため、最近では東京方面から参拝する人は減っており、依頼に応じてお札を郵送することもあるのだとか。

▼府中における職人の信仰の過去と現在

府中では、大工による太子講は行われなくなっているといいます。ですが、鳶職は現在でも太子講を行い、莫越山神社のお札をまつる人もいます。莫越山神社から太子講の掛軸を受けてきたという話も聞いたことがあります、詳細は不明です。また、住宅メーカーによる建売が多くなり実施数は減っていますが、現在でも上棟式が行われることがあるそうです。建築主が地域に溶け込むため、伝統行事継承のため、そしてなにより職人たちの慰労のためだといいます。

職人の文化のなかでも、さまざまな伝承やその変化があることがおぼろげながら判明してきました。しかし、前述の小学校校舎を建築した頃の職人たちの信仰については、よく分かっていません。こうした信仰は完全に廃れたわけでもなく、まだまだ事例を聞き取り、全容を把握できる可能性があるため、今後も情報を集めていきたいと思っています。

府中の身近な

昆虫絵巻



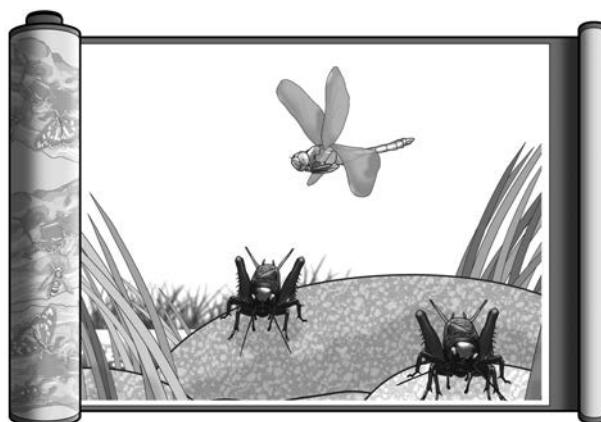
④ 昆虫タイムスリップ

都市化に拍車がかかり、府中の自然環境が大きく変わり始めた1970年代、周辺にすむ昆虫たちも変遷期を迎えることになります。それまでは農業中心の田園地帯だった府中は、高度成長期を経て大都市東京の一角を担うようになり、並行して緑のスペースは縮小の一途を辿ります。1960年には900ha近くあった市内の農地は、その後40年でその80%以上を失っており、いわゆる里山環境の消失が、昆虫相にも少なからず影響を与えた。少し時代を遡って、当時に見られた昆虫を探ってみましょう。

府中を含めた多摩地域は、関東の西に続く丘陵地帯であり、狭山・草花・多摩・秋川などの丘陵がそびえ、主にクヌギ・コナラで構成される雑木林に覆われています。かつては里山として利用され、人と林が持ちつ持たれつの関係を築きながら、絶えなき生態系を作っていました。

いました。府中の浅間山に残る雑木林も同様です。後の燃料革命により、薪炭への依存度は急降下し、里山を維持することなく放棄する農家が増え、そこに生きる生物は多大な影響をうけたようです。本格的に府中の自然調査が開始された1970年には、すでに数を減らしていた昆虫もいました。クロシジミ・アサマイチモンジといった蝶類やスズムシが、かろうじて記録されてはいましたが、すぐに姿を消しました。アゲハチョウの仲間で今や絶滅危惧種のギフチョウも、1960年代半ばまでは多摩丘陵や高尾山麓に生息しましたが、多摩地域では絶滅しました。これらの多くは、まさに里山の昆虫だったので。

さらに急速に進む都市化の影響で、徐々に数を減らしていく昆虫も目立っていきます。府中の自然調査が活性化した1975年あたりから、市内に



わずかに残る雑木林や草原、水辺に生息する昆虫が減りだすのです。特に希少種では、草原と水辺の環境を併せ持つ多摩川の河原に生息したカワラエンマコオロギやオオキトンボでしょう。

カワラエンマコオロギは、1927年（昭和2）に関戸橋下で発見された変り種でした。日本産エンマコオロギ4種の内、北海道に多く生息するエゾエンマコオロギと同種のものです。但しここで見つかった個体は鳴き方のリズムがエゾエンマコオロギとは異なるタイプで、多摩川中流域の河原にのみ見られたことで、この俗称が付きました。その後数年で消滅しましたが、非常に興味深い昆虫であったことに違いありません。また、日本産のトンボの中で絶滅の危機に瀕しているのがオオキトンボです。府中では1984年まで四谷にある多摩川への排水路沿いに生息していました。国立からの排水が流れ込み、ドブのような様相を呈したため1985年に本水路が埋め立てられ、ついに市内では絶滅しました。これらの貴重種がかつての府中に記録されていたわけです。他にも広大なオギやススキの原には、マツムシやイチモントジセセリなども見られましたが、今はもう確認できません。

一方、1990年代の府中には、温暖化の影響で、東海地方以南に分布するツマグロヒョウモンなどの蝶が北上して来たり、最近増えた中国産アカボシゴマダラなど、海外からの移入種が新たに入り込んできました。それらの多くは、街路樹や公園の植込み、住宅の庭木などを住処とし、現状の人の暮らしに見合った環境に順応しています。およそ30年間に亘る府中の自然調査で記録した昆虫は2,000種に及びます。浅間山や段丘崖、市内公園などでは現在も様々な種類が生息します。但し、周辺環境の変化は、元来生息した昆虫を消滅させ、あるいは新規の昆虫を出現させていることがわかりました。エサとなる昆虫相が安定しなければ、これらを捕食する動物相にも影響が及ぶはずで、ますます都市の生態系は変化の波に揉まれることになるのではないでしょうか。

（中村武史）

大西浩次星景写真展 —森から見上げた宇宙—

4/6 (土) ~ 7/15 (月・祝)

会場：本館 2 階企画展示室

この展示会は、長野県在住の天体写真家・大西浩次さんが撮影した、星空と地上の景色を融合した星の風景写真展です。大西浩次さんの写真展は、2011年と2013年に開催し、多くの方から好評を得ました。

今回はその第3弾で、森の息吹の中、天の輝きとその動きに目を見張り、耳を傾け、そしてその瞬間をとらえた貴重な写真20数点を展示します。ここでは、それらの写真から「森から見上げた宇宙」というタイトルにふさわしい2点を紹介しましょう。

まず、「森の中の宇宙」（写真下）は、日本百名山のひとつ、長野県と新潟県の境にある雨飾山のふもとの鏡池で撮影された1枚です。ブナの森の中から覗き見上げた宇宙…。そこには夏の天の川とさそり座があり、池に写りこんだその姿は、宇宙とのつながりを強く感じさせてくれます。

また、「森からの地球」（写真右上）は、長野市の北西に位置する戸隠で撮影されました。そこにある鏡池の対岸に沈む上弦の月が、池に立ち

上の霧を照らし幻想的な風景を演出しています。時間は、初夏の真夜中過ぎ。西側に空いた森の窓からは、西に傾いた北斗七星、月の上にはうしかい座とかんむり座が見え、夏の始まりを告げています。

森と星々が織りなす神秘的な風景をぜひご堪能ください。

(本間隆幸)



森の中の宇宙



森からの地球

～大西浩次さんのメッセージ～

私は、これまでいろんなところで星を眺めてきた。そして、わたしたちを取り巻く星空が、手に届かないはるか遠い宇宙にあるのではなく、この地上の風や音や、大地の香りや大気中の霞までを含めたすべてを見ることによって、初めて、宇宙の広がりや宇宙の奥行きを感じられる様になってきた。

森は、わたしたちの生命の象徴である。森の中では、光合成をするために、葉が交互に伸びて、下から見ると空一面が葉で覆い尽くされている。そんな森の中から星空が見えるのは、池や河川の脇、あるいは、晩秋以降の落葉のシーズンだけである。私は、四季の森の上の星空を見上げながら、この生命の星「地球」に生を受けた喜びを表現したいと思う。

史料に見る府中の事件簿

④飯盛廿の髪切事件



「史料に見る府中の事件簿」の4回目は、宿場ならではの事件をご紹介しましょう。

江戸時代の宿場の多くは、その繁栄を名目に、いわゆる娼婦を置いた飯盛旅籠の経営を許可されていました。文政4年（1821）に作成された府中宿の「宿方明細帳」には、旅籠屋31軒のうち5軒が飯盛旅籠だったと記されています。そこで雇われていた飯盛女は25人。当時幕府から許可されていたのは1軒当たり2人までなので15人多い計算になりますが、この超過分は月雇いによるものだという但書があります。役所への提出書類に堂々と書かれているわけですから、このような言い訳が通用していたということです。

そろそろ本題に入りましょう。今回、事件を起こしたのは、本町（現 本町）の名主で本陣でもあった三郎右衛門の息子・虎次郎が営む飯盛旅籠で雇われていたそめです。文化14年（1817）5月22日、そめは府中宿の五郎兵衛と共に、内藤新田（現 国分寺市）の重兵衛宅に向かいます。春頃より馴染みとなり、夫婦となる約束を交わした平次郎に逢うためです。

表向きは、飯盛旅籠で近隣の村人が遊ぶことは禁じられていましたが、今と同様100%守られるはずがありません。飯盛旅籠での散財が露見した平次郎は親類に預けられ、そめが訪れた時には親元の重兵衛宅には居ませんでした。それを聞いたそめは、懐中より剃刀を出して騒ぎ立てるのですが、その場は同道して来た五郎兵衛が剃刀を預り、事なきを得ました。

ところが、その後雪隠（便所）へ行ったそめの手には何故か再び剃刀が握られ、そのまま自身の髪の毛を髪（髪をまとめて頭の上で束ねた部分）からバッサリと切り落とします。そして、「平次郎の女房にするか、相応の金子を渡すか」と、重兵衛に迫ったのです。

翌23日に至り、やっと三郎右衛門が重兵衛宅を訪れます。このような髪型になった女性は飯盛女として役にたたないという理由で、そ

めの引取りを拒否して帰ってしまいます。困った重兵衛と内藤新田の村役人たちは、代官所に訴訟しました。

この事件の決着が記された同年7月2日の「済口証文」を見ると、中清戸村（現 清瀬市）・本多新田（現 国分寺市）・国分寺村（同）から仲裁人が入り、示談が成立しています。その際、重兵衛の所で髪を切ったのはそめの心得違い、年季中のそめと夫婦の約束をしたのは平次郎の心得違いとし、仲裁人が双方へ詫びを入れたようです。興味深いのは、平次郎がそめと取り交わした書付を両人が納得して返したからは、今後互いに「執心」しない、とあることです。夫婦となることを約束した証文のようなものが存在し、後顧の憂いをなくすため敢えてその事を明記したのだと思われます。

結局、そめは虎次郎のもとに引き取られましたが、その後の動向は不明です。言うまでもなく、当時の女性にとって髪の毛は非常に大切なものですから、それを髪より切り落とすとは、思い切ったことをしたものです。ある意味そめはあっぱれな女性だと言えるかもしれません。

史料には残っていないなくても、このような近隣の若者と飯盛女が関わる事件は、しばしばあつたと考えられます。中には相対死（心中）に発展したものもあったようで…。いつの世も男女を巡るトラブルはなくなるまいということでしょうか。

（花木知子）



本宿村に残された訴訟の写し 本宿小野宮 内藤治左衛門家文書